

(実践報告)

小児看護学演習における自作の視聴覚教材(動画)を用いた 効果に関する検討

—リアクションペーパーの記述内容から—

菅原隆成¹⁾ 渡部真奈美¹⁾

I. はじめに

常に教員は学生に対し、分かりやすい理解しやすい講義の方法や内容を考えて、日々講義を行っている。学生のレディネスを考えた内容や、各回との関連や流れを考えた構成、また他領域との関連を視野に入れた講義内容、グループワーク、演習等様々な工夫を凝らし、どのようにしたら学生の学習効果が上がるのかを検討している。

小児看護学について学生からよく言われることは、「子ども大好きなので楽しみです」、「子どもは病気ですらいち頑張っているから私も頑張らなきゃ」などといった、ポジティブな意見や考えと、「子どもと接することがないからどうしたらいいかよく分からない」、「イメージがつかない」「子どもへの声掛けがむずかしそう」などといった、ネガティブな意見や考えの2つに大別され、その多くは後者であることが多い。確かに近年の少子化や家族構成の変化などの社会的背景から学生が子どもと関わる機会は少なく、子どもへの関わり方がイメージつかない可能性がある。

小児看護学演習について池田ら(2014)は「小児看護学演習は「子どもとのかかわりをイメージできる演習」「対象者の視点を理解する演習」「技術習得の演習」「知識を活用して主体的に問題解決に取り組む演習」の4つに分類できる」としている。このうちの「子どもとのかかわりをイメージできる演習」「対象者の視点を理解する演習」「技術習得の演習」については、実際に子どもに協力してもらって演習することが理想であるが、実際には行えない。成人における演習では、学生同士で演習を行うことができるが、小児看護学においてはモデル人形を用いたりロールプレイをするなどして行う必要があり、想像力を働かせたシミュレーションになってしまう。このような状況で、小児看護学演習の学習効果を上げる工夫の一つとして視聴覚教材の利用が考えられる。

現代はテレビやスマートフォンなど、デジタル機器がほとんどの家庭で普及しており、幼少期から視聴覚による情報を得ることに慣れている。総務省情報通信政策研究所(2019)によると平日における10代のテレビ、インターネットの平均利用時間はテレビ71.8分、インターネット167.5分で、全年代で見てもテレビ156.7分、インターネット112.4分であり、新聞の8.7分、ラジオの13分と比較し、テレビやインターネットが情報を得るツールとして一般的になっていることが分かる。平日における10代のインターネット利用の内訳を見ると、「ソーシャルメディアを見る・書く」が71.6分、「動画投稿・共有サービスを見る」が60.1分と動画を中心とした視聴覚から情報を得ていることが明らかとなっている。実際、文部科学省の推進もあり、幼稚園・保育園も含めた子どもの教育の場では当たり前視聴覚教材が使われている。また先行研究において、医学生、看護学生の授業における動画教材の有用性について瀬戸山ら(2017)は「動画を、より良い医療のために活用できる教材である」と述べている。

これらのことから、動画を中心とした視聴覚教材を使用することで、学生への学習効果や意欲が高まるのではないかと考えた。そこで今回、演習内容に沿って教員が自作した視聴覚教材を用いて演習を行い、その時のリアクションペーパーの内容を分析し、学習効果に関する検討を行ったので報告する。

1) 朝日大学保健医療学部看護学科 小児看護学

Ⅱ. 小児看護学演習の概要

1. 概要

小児を対象とした看護技術の基礎を学ぶ。また、紙上事例を用いた看護過程の展開を行い、個別性を重視した看護援助の方法を学ぶ。

2. 目的

小児の成長発達過程および健康レベルに応じた看護を、科学的根拠に基づき実践するための基本的知識および技術を修得する。

3. 到達目標

- 1) 小児看護に必要な日常生活援助や診療に伴う基本的な援助ができる。
- 2) 事例を通して、小児を統合的にアセスメントし、それぞれの成長・発達過程に合わせた子どもと家族への看護過程の展開ができる。

4. 演習の流れとシラバス

対象となる学生数は、今年度は108名で担当教員は2名であった。実習室に入れる人数などの限りがあることや、少ない教員数で学生に多くの学びをしてもらえるように、おおよそ半分の人数でグループ分けをし、技術演習と事例展開を約半分ずつ交互に行っている(表1)。事例について今年度は実習や、国家試験、また臨床においても頻繁に目にする気管支喘息について、個人でアセスメントから計画立案までを行い、計画についてはグループワークで展開した。演習については前週に演習内容のオリエンテーションを行い、その際にポイントとなる部分についての講義を10分～20分程度行い、事前学習を提示したうえで次の週で演習を行った。使用する教科書や参考書などは、写真の多く載っているものや、DVDがついているものを使用している。さらに、市販されている視聴覚教材の使用も適宜していて、今回も活用している部分もあるが、限られた時間の中では少し長かったり、講義の中で伝えたい部分との乖離があったり、そもそも市販されていなかったりしている内容もある。限られた時間と資源の中で最大限の学習効果を得ることを目的とし、自作の視聴覚教材を用いることとした。

表1 2019年度小児看護学演習シラバス

回	内 容
1	ガイダンス 小児の看護過程について 事例紹介 バイタルサイン、フィジカルアセスメント
2	看護過程① 情報の整理、アセスメント
3. 4	技術演習① バイタルサイン、身体計測、小児用ベッドの取り扱いかた
5. 6	看護過程② 解釈と統合、看護問題抽出
7. 8	技術演習② 与薬、検体採取 技術演習③ 輸液管理、検査の介助、抑制
9. 10	看護過程③ 看護計画の立案
11	講義・DVD視聴 清潔ケア、経管栄養(胃瘻)
12	技術演習④ 経管栄養(離乳食)、口腔ケア
13. 14	看護過程④ グループ発表の準備
15	プレゼンテーション、演習のまとめ

Ⅲ. 視聴覚教材について

今回は7, 8回目の「技術演習②与薬, 検体採取」の部分において視聴覚教材を作成した。与薬については経口摂取が可能な児への内服介助について、検体採取については採尿パックを使用した採尿についての演習であった。

与薬については子どもの内服について、1歳の児の乳首を使用した水薬の内服の様子を記録した。実際に研究者が声をかけながら、嫌がる児に対して工夫をしながら、母親の協力を得ながら内服する様子を記録した。また、3歳の児に対して、声をかけながら散剤を直接内服する様子を記録した。1歳の児に対しては、座薬の挿肛を行う様子も記録した。与薬については嫌がる児に対して具体的にどのような声掛けをするのか、どのような工夫をするのかなど、実際にどのような工夫をするかの部分に焦点を置いた内容とした。

検体採取についてはおむつを使用している1歳女児に採尿パックを貼付する様子を記録した。ここでは、採尿パック貼付時の具体的な注意事項が分かるような内容とした。

なお、いずれの児も通院中の内服や、採尿が必要となった時に撮影しており、両親の同意を得たうえで撮影を行っている。

IV. リアクションペーパーの記入について

小児看護学演習終了時に映像資料を用いて演習を行ったことについての感想や意見の自由記載をリアクションペーパーへの記入を依頼した。今回使用したリアクションペーパーは、ほかの小児看護学演習で使用している様式とは異なったものを使用した。その際、記入されたものは教員の振り返りのために使用し、成績には一切関係ない事、個人が特定されない形で大学の紀要に投稿する可能性があることをリアクションペーパーに書かれた文章と口頭でもって説明した。

V. 結果

回答総数は、101名で、視聴覚教材についての感想意見は、【よかった】と、【よかったが気になる点がある】の2つに大別された。【よかった】の数は88名で87.1%、【よかったが気になる点がある】の数は13名で12.9%であった。【よかった】の中の感想・意見の内容は、「教科書だけではイメージできなかったのが動画でみれて流れが分かってよかった」「身近に小さい子どもがいないのでどんな声掛けをしたらいいかが分かった」「人形では分からない子どもの実際（リアル）の反応が分かってよかった」「イメージができて演習がしやすかった」「実際の手順に沿ってやっていたので分かりやすかったし、声掛けの一例が見れてよかった」「ほかの講義でも動画を見たい」などがあつた。【よかったが気になる点がある】の中の感想意見は「映像で見る方が頭に入ってきやすいと感じたが字幕などの解説があるともっとよかった」「物品の解説が欲しかった」「具体的なことが分かったが、動画で足りない部分は口頭での説明が欲しかった」などがあつた。

VI. 考察

今回の試みでは、すべての学生が動画があつてよかったと回答している。これについてははじめにでも述べているように現代の学生が、文章や写真ではなく動画から情報を得たり、学習することに慣れていることが考えられる。小児看護学において、子どもと関わるのが少ないからこそ、教科書や写真ではイメージすることがむずかしく、「声掛けの方法やが分かった」という反応や、「実際の反応が分かった」という反応があつたことは、演習で技術を学ぶ上で映像資料を使用することに一定の効果があつたことが示された。

到達目標の1)小児看護に必要な日常生活援助や診療に伴う基本的な援助ができるに到達するにあたり、演習で学ぶ内容についてイメージがつかないままに演習を行うよりも、よりリアリティのある視聴覚教材を使用することで、イメージもわき、目標に効率的に到達するのではないかと考えられる。

看護は個別性に応じ、それぞれのケアやコミュニケーションについて様々な工夫をしていく必要がある。特に小児では成長発達の途中にある患者を対象とするため、個別性に応じた声掛けの方法や、ケアの方法の工夫はとても重要であるため、より臨床に近い実際の一部を視聴覚教材を通じて見て学ぶことは学生にとって、大変重要であつたと考える。視聴覚教材を使用することの効果について野口ら（2007）は、子供の気持ちや人

権を守ることの重要性を理解し、子どもの反応に合わせた測定方法や援助方法を選択する必要性の理解に効果があったと述べている。

しかし、一方でリアクションペーパーに「映像で見る方が頭に入ってきやすいと感じたが字幕などの解説があるともっとよかった」「物品の解説が欲しかった」「具体的なことが分かったが、動画で足りない部分は口頭での説明が欲しかった」などの意見があったことは、真摯に受け止め、今後の教育活動の糧とし、これらを踏まえた視聴覚教材を準備することが必要である。また、演習において学生がどこで分かりにくさを感じているかを把握しそのニーズに合った講義を行っていくことも必要と考えられる。

視聴覚教材の使用については学生のニーズがあることが明らかとなったが、同時により学生に分かりやすい視聴覚教材を準備することが今後の課題として明らかとなった。

Ⅶ. おわりに

小児看護学演習における視聴覚教材の使用について一定の学習効果があることが分かった。学生の反応から、分かりやすい、理解しやすい講義のためには、イメージできるかどうかが大きく関わっている事も分かった。また、学生が視聴覚教材を用いた講義を望んでいることも明らかになったため今後も積極的に取り入れていくことを検討したい。しかし、映像にたよるばかりではなく、教科書的な基本事項や、教員の臨床経験に基づく技術をより実際の臨床に近い形で伝えていけるように努力していく必要がある。学生が、講義を受けて理解できること、学んだことが国家試験の合格に寄与していること、臨床で役に立つ学びができることなど、学生が有意義に学習することができるような講義を展開したい。

本活動報告において、開示すべき利益相反は存在しない

文 献

- 池田友美, 鎌田佳奈美, 亀田直子 (2014). 小児看護教育における演習の効果に関する文献検討. 摂南大学看護学研究, 2 (1), 41-46.
- 野口明美, 佐野明美, 服部淳子, 山口桂子 (2007). 小児看護技術教育の効果的な演習プログラムの検討—バイタルサイン測定場面のイメージ化をはかる—. 日本小児看護学会誌, 16 (2), 24-32.
- 瀬戸山陽子, 青木昭子 (2017) 低学年の医学生, 看護学生授業における患者インタビュー動画教材の有用性に関する質的分析. 医学教育, 48 (2), 243-247.
- 総務省情報通信政策研究所 (2019). 平成 30 年度 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書<概要>.